



南極観測隊経験者に インタビュー



2次・16次・20次・27次夏、4次・8次・22次越冬、他外国隊

よした よしお
吉田栄夫さん

公益財団法人日本極地研究振興会理事長

(2016年7月現在)



南極では、どんな研究やお仕事をしたのですか？



1960年5月奥氷河（のち白瀬氷河）の浮氷吉に旗を立てて9月に再測、およそ2km/yearを明らかにした。南極でこのように速く流れる氷河があることを、世界で初めて示した。

私の専門分野は地学のうち、南極の氷床やその中の早く流れる部分である氷河が、どのような性質をもち、それが過去数百万年の間にどのように変わってきたか、それによってどのような岩盤や氷河堆積物の地形を作り上げてきたかを、明らかにする仕事です。しかし、南極観測に参加したのは第2次から第27次までで、2次と4次の時の公式担当は地理（犬）及び地学・犬となっており、犬いぬぞりも担当、地図作りのための天測（天文測量）と、やまと山脈では地図作りのための三角測量、内陸調査のナビゲーターこしやう調査などをやり、第8次越冬では隊長の任命により設営主任も兼ね、設営部門全般の調整などに当たりましたので、一言でお答えするのは難しいのです。



露岩の岩盤に残された氷河擦痕から、過去の氷床流動を探る。



初めて南極におり立ったときの感想をおしえてください。

私が南極で最初に踏んだのは、海水でした。第2次観測で、宗谷は流水縁に入ったところであっという間にピセットされ、38日間にわたって海水とともに漂流中のことでした。そのうち突然船の周囲の氷がぐるぐると回転しながら動き出し、この時海水の上だったら船に戻れなかっただろうと慄然とし、圧倒的な自然の力に打たれました。大地を踏んだのは第4次の時、ケーブタウンでベルギー隊からもらったハスキーの仔犬ベルガとヘリに搭乗し、やっと来たかとの想いでした。



ピセットされていた『宗谷』を救援に来たアメリカの砕氷船『バートン・アイランド』。流水帯に再突入した宗谷は、これ以上進めなかった。



4次隊。仔犬ベルガを連れ、前年導入された大型ヘリで昭和基地へ。



一番印象に残ったこと・一番楽しかったことはなんですか？

第4次越冬中、私の仕事を手伝ってくれるとして、悪天候の中同行してくれた福島紳さんと、激しさを増したブリザードの中ではぐれてしまいました。偶然辛うじて基地建物に辿りついた私は、村石幸彦隊員と捜索に出ましたが、すぐにまた基地建物に戻れなくなり、25時間ほどを野外で過ごし、やっと戻りましたが、紳さんは行方不明となりました。



4次越冬隊長誕生日
向かって右に立つ中に福島隊員
向かって左に立つ中に吉田隊員

それから7年4か月後、8次越冬を終えて「ふじ」で帰国に就いてすぐ、9次越冬隊矢内桂三隊員が西オングル島の北西端で紳さんの遺体を発見、私達を乗せた「ふじ」はただちに引返し、現地で茶毘（だび）にふしてご遺骨を私が背負って帰国しました。「理外の理」の強い思いを感じました。

観測隊は、それぞれの隊が「極地」という非日常的な、素晴らしくかつ厳しい自然の中で、観測に従事する研究者とそれを支える様々な職種の人達が、課題とされた目標の達成に、わいわいと取り組むこと自体が楽しみでした。皆平等な立場で日常生活を共にする、ということはほかにない稀有の機会です、これを満喫することが、南極ならではの楽しみでした。



西オングル島から昭和基地へ、鳥居鉄也越冬隊長の後ろから、福島隊員の遺骨を背負って歩く吉田隊員（右）